

乳房外 Paget 病（にゅうぼうがいぱじえっとびょう）

乳房外 Paget 病について

乳房外 Paget 病（にゅうぼうがいぱじえっとびょう）は、主に高齢者の陰部、肛門周囲、腋（わき）の下などに発生する、まれな皮膚がんの一種です。この病気は、汗腺の一種であるアポクリン汗腺や肛門腺から発生すると考えられている腺がんの一種です。

日本を含むアジアでは、欧米に比べて発生頻度がやや高いとされており、人口 10 万人あたり年間約 0.28 人程度と報告されています。非常にまれな病気ですが、早期発見と適切な治療が重要です。

症状について

乳房外 Paget 病は、赤い発疹（紅斑）や茶色や白っぽい色のシミ（色素斑）で始まることが多く、病気が進行すると、皮膚のただれ（びらん）・しこり・出血などが見られることがあります。また、リンパ節や内臓、骨に転移することもあります。

診断について

診断のためには、視診と触診で皮膚の状態を観察し、皮膚生検（病変部分の皮膚を少し採取し、顕微鏡で詳しく調べます）を行います。必要に応じて CT、PET-CT など腫瘍の広がりや転移の有無を検索します。

治療について

乳房外 Paget 病の治療は、病気の進行度や患者さんの全身状態によって異なります。

転移性病変がない場合には手術治療が第一選択になります。十分な余裕をもって、周囲の正常組織ごと切除します。同時にリンパ流を検査することで、腫瘍から最初に流れ着くリンパ節を摘出し、リンパ節転移がないか確

認する場合もあります（センチネルリンパ節生検）。リンパ節への転移がある場合、リンパ節郭清術と呼ばれる手術でリンパ節群を一塊に切除することもあります。

手術が困難な場合や、再発リスクが高い場合には放射線治療を行うこともあります。

遠隔転移がある場合には、抗がん剤による薬物療法を行います。ドセタキセルや白金製剤、ティーエスワンなどの薬物治療が用いられることがありますが、いずれも保険収載されていません。また、上皮系皮膚悪性腫瘍として免疫チェックポイント阻害薬（ニボルマブ）が用いられることがあります。

最近では、がん遺伝子パネル検査を用いることで、患者さんごとに最適な治療法を選択する個別化治療も進められています。

執筆者

- 氏名： 森 章一郎（もり しょういちろう）
- 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
- 診療科： 皮膚科

- 氏名： 奥村 真央（おくむら まお）
- 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
- 診療科： 皮膚科